

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	大北 陽一
論文担当者	主査 垣淵 正男
	副査 竹島 泰弘
	副査 古江 秀昌
学位論文名	Yearly changes in cases of acute acquired comitant esotropia during a 12-year period (12年間における急性内斜視症例の年次変化)
論文審査の結果の要旨	
<p>急性内斜視（AACE）は非常に稀な疾患と考えられてきたが、近年、症例の報告が散見されるようになり、特に若い世代で顕著であることが明らかになってきた。</p> <p>本疾患の原因としてデジタル機器の過剰使用による調節緊張の可能性が指摘されており、特にスマートフォンの過剰使用と内斜視発症の関連が指摘されるようになった。</p> <p>申請者は、2008年1月から2021年12月までの間に兵庫医科大学眼科を受診した患者のうち、突然の複視または内斜視を30歳未満で発症したAACE症例をそれら病歴から、患者数の年次変化、年齢、屈折異常、AACE型、内斜視型、スマートフォンの過剰使用の有無について後ろ向きに検討した。</p> <p>その結果、AACE患者の総数は171例で、年毎に有意な増加を認めた（Pearson's correlation coefficient, 0.9450; $p < 0.0001$）。また、中学生以上、近視、Bielschowsky型、基礎型の患者で有意な増加を認めた（全て $p < 0.0001$）。</p> <p>年齢においては小学生以下と中学生以上の2群間の比較で中学生以上の群でAACE患者の増加率は有意に高く（推定値 1.951、$p < 0.0001$）、屈折異常においては近視群と非近視群で比較したところ近視群においてAACE患者の増加率は有意に高かった（推定値 1.891、$p < 0.0001$）。スマートフォンの過剰使用においては、確認できた133例中82例でスマートフォンの過剰使用が確認され、スマートフォンの過剰使用がある患者においてAACE患者の増加率は有意に高かった（推定値 1.098、$p = 0.0009$）。</p> <p>申請者が本研究によって示した内容は、急性内斜視に関する新しく重要な知見であり、学位授与に値すると評価した。</p>	